

母娘関係の再結合と再々結合による 「母性」と「自己性」の葛藤

臨床心理学教授 東山 弘子

要 約

日本の母のイメージと現代の具体的な母子関係はおおしく乖離してしまった。日本の子どもの一部に現れている精神病理現象の基盤には母子関係の質的变化があり、母子関係の変化をもたらしているのは家族構造の変化であると考えられる。こうした家族行動の変化と母親の子育て機能の急速な弱体化が進行し、母である女性たちの中には、家庭外に自分の居場所を見つけて子どもを拒否するか、自らも潰れて弱者どうしの母子共生関係をつくるかのいずれかしか選択肢が見つからない状態に陥っているように見える。現代女性が神話的母亲を生きることと自己実現を目指して生きること引き裂かれて生きるという状況が、母性喪失を生じさせているといえる。母性の喪失は単に子どもの問題だけではなく、中年の課題、老年期の課題、そして家族の問題、地域の問題、社会の問題にまで拡大してきている。そのような状況を打破しようとして、女性たちは心理臨床の場で母性性と女性性が拮抗し、統合できない葛藤や抑圧してきた心情をありのままに語り始めている。とくに困難な思春期の事例の場合、母である女性が母であることを自己受容できないというアイデンティティの危機が吐露されている。

CGユングは「すべての母は自らのうちに娘を含んでおり、すべての娘は自らのうちに母を含んでいる。すなわち、あらゆる女性は母にさかのぼり、娘に伝えられていく」といっている。思春期の女性や母面接、中年女性のケースにカウンセラーとしてかかわるとき、困難を感

じるのは、この混沌を含んだ女性のライフサイクルのゆえではないかと思われる。最近の思春期女性の症状は、甘えと暴力化、身体言語ともいうべきプリミティブな叫びと身体化が際立っており、言語による論理的表現を嫌う傾向は、女性の論理的発達を求め、「自己性」の開発をよしとする近年日本の社会的歴史的要求に対する女性たちの反逆ではないかとさえ思われる。

女性の思春期と思秋期はともにアイデンティティを模索する移行期であるという意味で類似している。思春期に始まった「自己性」の模索は、結婚のテーマに直面すると一時中断することになる。結婚によって母からの自立と自己性の追求が成り立ったかに見えるが、実は出産によって実母との結合関係は復活し、娘性が復活する。そして娘が思春期に達したころ、再度この課題に直面させられることになる。思春期中断したところから、自己性の模索の続きが再開されることになるのである。しかし、そのプロセスは老親の介護の課題によってもう一度中断され、実母との再々結合関係が復活することで娘性が復活する。ここに現代日本女性の葛藤と個性化の難しさがあると思われる。

日本の伝統的なものの見方と西欧的自我のあり方が大きくずれている現代の日本社会において、母性喪失から個性化に至るプロセスをどう支援できるかはまだまだこれからの課題である。

キーワード

母性 自己性 母娘関係の再結合 再々結合

1 母性の諸相

(1) 神話における母性

日本神話のなかでは、単なる母の情を越えて新たな意識を産み出す「肯定的母親イメージ」が強調される（横山博-1）。横山はその著書の中で次のように論及している。

イザナミは日本の国土を産みだし、火の神を産んだ後、死亡し黄泉の国へと赴く。オオケツヒメは食物を取り出し殺された後、日本の民に農業の基礎を残す。コノハナサクヤヒメとトヨタマヒメは天皇の祖先を残すことで多大な役割を果たした。その他オオクニヌシを救ったサシクニワカヒメなど、多くの女神の全てに言えることは、産むことと自己犠牲的に身を引くことがその中心的役割として評価されており、そういう意味で母性の「肯定的側面」が強調されているということである。自分のこころの中の「醜い否定的側面」を一心に生きようとせず、新しい意識のために自らを犠牲にする典型的な母親像がうかがいあがる。

西欧神話にみられるような「否定的側面」まで精力的に生きる女神の姿はまれであり（1-p.96）、日本の集合的無意識はことさら排他的に「母親元型」の「肯定的側面」にのみ光を当ててきたとも言える。

アマテラスは河合によると、アテーナーとの強い類似性が指摘されている。アマテラスは、日本に最初に現れた三柱の神の柱であるタカムスヒノカミと共同で権威をもち、しっかりと高天原を治め、自分の孫であるニニギをこの国に降臨させる。ニニギとの関係と暴力的なスサノオとの接触を通してアマテラスは「父の娘」から、成熟した女性へ、そして母親へとみごとに変容した神であると解釈される。

河合によって「デーメーテル-コレ」のような「母娘」関係の記述が古事記にはまったくないことが指摘されている。アジアでは「父娘」関係が「母娘」関係とほぼ同じ役割を果た

し、日本における父親像は母として機能するという（河合隼雄-2）。

(2) 佛教の影響

佛教において女性は「男性を惑わせるもの」とされ、女性を遠ざける修行のなかで僧としての深まりが追求された。経典や教えのなかに語られる母は「慈母」として描かれ、子を慈しむ肯定的側面が美化され、強調されている。説話として残る「鬼子母神」は、子を貪り食う母の罪でさえ、観音の慈悲にすがり、仏に帰依する事によって許されるのだと説いているが、心理学的には、母性の否定的側面を恐ろしい、あるまじきこととして否定されながらも、そういうことがあるのだと知っていたいわば、集合的無意識が働いているのではないかと考えられる。

ともあれ、現代にいたるまでの長きにわたって、母性神話が佛教の強い影響をうけて日本人の心を支配し、女性たちを呪縛してきた事実は誰もが認めるところである。

(3) 家族制度の中の母性 —— 自己犠牲性

家族制度は父権制、システム維持のために重要なものであった。持統天皇の時代に制定された律令制度が藤原氏によって受け継がれ、武家社会がはじまる12世紀には父権社会原理が定着し、一族の長男が家督を相続して絶対的な力をもち、ほかの弟や姉妹、分家した親族は長男に従うように義務付けられていた。女性は男性に従属し、母、嫁として家族制度の実質的支持者の役割に限定され、自己犠牲的生き方を強いられてきた。すべては「家のため」、嫁しては後継ぎの男子を産み育てること、舅姑に仕え、夫、子どもに仕えることが女の定めとされ、それ以外の選択はなかった。徳川時代にもっとも強く精巧なものとして完成された。日本の家族制度は家族や共同体の調和と安定性を維持することが優先され、個人を抑圧してきた性質のも

のであったが、身分制度の高い一部では固く守られたが一般のレベルにまでは浸透していなかったようである。西欧のように神と個人が契約する厳しさとは質のちがいがあった。明治時代に民法が制定されると、個人レベルで規定されたために実質的には過酷なものとなったと思われる。良妻賢母として生きることがほとんどの女性たちの人生であり、個をもった女性としての生き方などとても考えられなかった。

多くの文学作品や歴史、教育のなかに、自分の子どもの養育に専念し、もっぱら家族内のできごとに心を砕く、「よき母」像を見出すことができる。これらの母親のもっとも重大な関心は、家族の関係性のありかたである。このようなアイデンティティはもちろん女性を苦しめた歴史を否定できないが、現在のようにアイデンティティの混乱から見ると、産み育てることだけで（あえてこの表現をする）大きな価値あるという社会の目は女性に幸せ感をもって子育てをさせていた一面もあったが、娘たちに「良妻賢母」が女のいきかたとして厳しく受け渡されて行った。

筆者は「母性」機能のひとつは自己犠牲性であると考え。それは、私の子ども、またはそれに代わる存在を思いやり、どこまでもその可能性を信じ大切にすることで、自分自身の可能性もまた開かれていく、というものである。自己犠牲性と献身とは、自分の事情や都合を消して子どもの都合に合わせて欲求をみだしてやりながら、恩に着せず、見返りを求めないアガペの愛を実現できることは、子どもとの関係において体験しうるものである。子どもとの関係の中で自分が見えてくる。自己犠牲と献身の能力が自分の中にあることを喜び、自分と自分の母との関係における抑圧された感情が再現されていることも子どもとの関係をとおして再現されていることに気付かされることもある。いずれにしても自己犠牲性と献身は、一見自分を削る

マイナスの行為で、損をしているかのように見えるが、自分自身の可能性が開かれるというプラスの面が大きいことをわすれてはならない。このことを自分のものとなしえたとき母性性と自己性が拮抗するのではなく、統合された形で共存する深い内的変容をなし逃げられていると考える。

現代の日本において、そのような自己犠牲性を可能にするような家族や社会の支援態勢が、子育て支援対策のような国家レベルで始められようとしており、歴史的に逆流した自己犠牲性の檻にとじこめない、新しい認識での支援になるように望みたい。

（４）第二次世界大戦後 —— 核家族化と個人化

旧憲法で守られていた家族制度は廃止され、女性が、政治的には男性と同等の権利を獲得し、政治レベルでは家族システムの厳しい重荷から開放された。社会は西欧化を求めて急激に変化し、核家族化していても、人々が家族に求める幸せの中身は今も昔もかわらない。60年近くたった現在でも意識レベルでは旧態依然とした「家」意識が支配し、個人の意識との乖離の大きさが心裡療法のテーマのひとつになっていることはすごいことといわざるを得ない。

人々は家庭幻想を持っている（小此木啓吾-3）。本音が話せてところが通じあう理想的関係にあふれた一家団欒の「ウチ」のイメージが人々の意識を支配し、母性的母親がそのイメージを支える存在として固定化している。フェミニズムの台頭は固定化されたイメージから女性の解放に大きな貢献をし、時代の流れは近代化、国際化の流れに乗って急速に女性の生き方を変えてきている。

2 現代的諸問題

(1) 現代化と家族

現代家族の変貌は急激に進み、一家族のサイズの平均が4人に満たない時代となった。結婚によって「一人前」の女性として社会的認知をえたはずであったのに、大家族のわずらわしさから逃れて幸せな家族をできるはずであったのに、現実には社会から疎外され、出産と子育てがますます疎外感、見捨てられ感、置いていかれる不安を助長する。子どもと夫婦の核家族でくらすことが幸せをもたらすというのは幻想だったのか……。

関係の喪失ないしは断絶が学校、地域、職場などの「ソト」でおこっているのみならず、「ウチ」である家族関係で起きていることがゆゆしき現状である。家族の成員が少ないことや日本人が西欧的人間関係を構築できるほど自我が確立していないことも相まって、家族の問題を抱えられる「うつわ」としての機能を発揮できなくなっていることは多くのひとが指摘するところである。このような関係の喪失による思春期のこどもたちの心理的問題や犯罪が、現代家族の危うさと核家族の崩壊を予感させる。

(2) 少子化 —— なぜ子どもを産みたくないか、「母性」と「自己性」の葛藤

文明の発達とともに、生物的、「土の匂いのする」母性、子どもを産み育てることの価値が低くなってきている。それは、現代に生きる日本人女性たちが自我の確立を目指すとき、母性がそれを阻むものとして感じられることに由来している。「母性」は良くも悪くも自己犠牲的エネルギーを他者につきこむことでなりたち、そのことが自己の喜びとして感受されるものであるが、生物的で誰にでもできるあたりまえのレベルの低い、そして過去女性たちが恨みをこめて語る女の哀しみの根源としてのイメージが強い。自分の母を見てもああいう生き方だけは

したくないと思わせられる。一方、自我の確立をめざし、さっそうと社会的進出をめざしている女性にあこがれる。このような女性たちは自分のエネルギーを母性を発揮することに浪費しないで自己のために使っているという意味で、母性に対して「自己性」と定義すると、「母性」と「自己性」のあいだの葛藤状況が現代女性のところに亀裂を作り出しているといえるのではないだろうか。どのような選択をするか、それが女性たちにとって苦しい課題なのである。あれかこれかではなく、あれもこれもが理想であるが、その両立の凄まじさが予測されるので、よほどのモチベーションがなければひるんでしまう。少子化現象は、母性よりも自己性に引張られる女性たちが圧倒的に多くなってきていることの現れである。もちろん母性的に生きる生き方を選択する女性はたくさんいるし、女性性と母性性との拮抗を体験せずに両立している女性もたくさんいる。しかし、子どもを産んだら「自分が損をする」と感じる女性や、産むことは拒否しないが子育てのエネルギーは「損失」であると感じる若い女性たちが少子化現象を深刻化させている。人間をトータルな存在として成長を願うならば、自己性を追求しつつ、なお母性をも受け入れて生きることを理想として受け入れる女性がおおくなり、そのことを可能にする社会が出現する努力が必要となる。

(3) 共働き

共働きの家庭は歴史的には昔から存在した。農家、商家、工場経営など、女性が労働を受け持つ家庭はあたりまえだった。女性たちは労働と子育てをこなしていたのである。職住近在であり、家族制度がいきとおり、大家族で生きていた時代には、子どもは子ども集団をつくり、地域のなかで育っていた。わけ隔てない目でおとなたちの誰かが子どもたちを見守っていたの

である。

しかし、現代の共働きはまったく様相を異にしている。核家族の家庭が普通で、親たちは仕事をするために家庭から出て行き、仕事が済むとまた家庭に帰ってくる。男性は仕事が絶対的に優先されて家庭に不在の傾向が強く、コミュニティにも子育て機能をはたすおとなはいない、すなわちコミュニティが母性機能を失った現代の子育ては一点集中的に母の責任の範囲で行われることになる。

働く女性の数は成人女子人口の5割を超えたが、働くことによって得られる幸せ感とはそれほど大きくはない。職場は縦社会であり、男性原理が支配しているので、自己の男性性を開発することに意義を感じていれば多少のストレスはやりがいになるが、そうでなければ相当厳しいのではないだろうか。これだけ厳しい現実であっても、働こうとする女性は増えつつけている。女性たちは何故働くのか。

女性たちが家庭から社会に出るのは、まず自分の人生が豊かなものでありたいという願いからであり、それが家庭に反映することを望んでいる。仕事を通して人間として豊かな体験をし、人格が豊かになっていく喜びを味わうために、自己愛的動機づけのもとに働くが、働くことによって手に入れた家庭の社会化、開かれた家庭という姿を土台にして子どもたちに人生の意味を教え、人間的な体験を深めさせることができるはずであると信じて働くのだ。しかし、共働きはどのようにやってきたかによって家族の変容にも家族の亀裂を深めることにもなるリスクを秘めていて、それぞれの家族関係と個人主義の微妙なバランスによって保たれるという危うさも秘めている。共働き家族で育つ子どもたちはますます増える傾向にある現在、家庭においても学校教育の場においても母性的ケアに欠ける子どもたちが増える傾向にある。家庭において虐待の件数が多くなり、子どもに対する

ケア以上に母親に対する支援が必要とされていることを考えると、保育所を卒業したあとの児童と思春期の子どもに対して、組織や地域が個々の母に代替しうる母性機能を発揮することが求められていると考えられる。このように共働きは女性の生き方が変わるといっただけにとどまらず、社会的にも家庭的にも男と女の関係を変え、子育てを変えていくことになるのである。

(4) 現代社会日本における母性喪失

先に述べたように、時代のうねりはあまりにも早く大きな変化をもたらし、女性の意識変革と社会参加をもたらしたが、社会システムや社会の意識変革がそれについていけないためにさまざまなひずみが露呈し、女性のこころにも新しい苦悩と課題をもたらした。すなわち、選択肢が増えたことは選択できる喜びであるが、選択しなければならぬということでもあり、自己選択にともなう責任を負う自我の強さ、個人としての成熟が求められるという事実が見えてきたのである。それに対応できる女性のモデルはまだできあがっていない。母の世代である中年期の女性、娘の世代の思春期女子、さらに高齢世代の女性たちそれぞれが新しい葛藤をかかえることとなった。関係の断絶は深刻で、伝統的な女性文化が伝わらないことが指摘されはじめている。

母性社会における父性喪失は、1963年にミヒャーリッヒによって指摘されている世界的傾向である(ミヒャーリッヒ-4)。わが国においても、1960年代の高度経済成長以来、多忙な会社中心の経済活動に家族が組み込まれていき、父たちを職場にとられて家庭には父親不在が急速に進行していった。

日本は母性的社会であり、組織としての父は存在したが、個人としての父は存在しなかった。けれどもその延長線上でおこってきた母性

喪失の現象はより深刻な問題である。

ノイマン的な西洋の視点からは、現代の日本は単なる「父なき社会」ではなく、女性の心理発達が各段階でうまくいかない社会であるといえよう。現代日本は、西洋的な「愛」の認識だけではなく、「情」という伝統的な意識がまだ根強い国である。

3 女性のライフサイクルと母性の発達

(1) 円環的発達と複線の発達の二重構造化

フロイトは前エディプス期までは男女ともに同じように発達するという見解をもっていたが後に訂正し、女兒は男児のエディプス期体験とは異なることを明確にした。

女兒は自分が母親から離れた別の人間であることを男児ほど強く認識せずにエディプス期を迎え、依存性を引きずったまま父母と自分の三角関係を維持する。父親へのエディプス的愛着を抑圧しない点でも男児とは異なる。その後は男女ともに自我の発展を目指して能動的な傾向が続き、思春期にいたる。しかし、少女にとっては長い間依存していた幼児期の最初の対象である母親から独立することが次の課題となる。しかし、生活上の世話をしてくれる母親からの精神的独立は容易なことではなく、母親側も依存関係に満足感をもっているため、少女が母親との絆を切って独立するためには外からの助けが必要になる。そこで少女は、同年輩の仲間と行動をとることにすることで自我のささえをもとめ、いつまでもこどもでいたいという自己内部の願望と格闘する。同時に、異性としての父親に再び関心を持ち始める。(三川孝子-5)

フロイトの弟子であったドイッチェは、長い臨床経験から、女性の思春期における体験が後の母性性につながりがあると指摘した。彼女によれば、女の心理は、エディプスコンプレックス形成前の、男よりも堅固で長期にわたる結合

を、母親に対して持っているという事実を土台とし、この時期における父親との関係が少女の攻撃的エネルギーを「マゾヒスティックな性格」へと変化させるのではないかと語っている(ドイッチェ-6)。

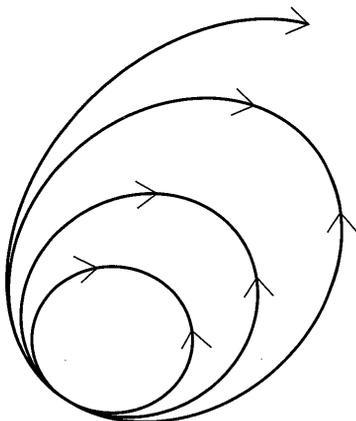
女子の心理発達は男子の場合とかなり異なっているという認識は現代では支持されているが、今は既存の理論が見直されている段階で、その内容についてはまだこれからの研究によらねばならない。エリクソンの理論やユングの理論でさえ、男性的アイデンティティを追求して生きようとする女性に限り適用されうるが、全てをカバーできるわけではないと指摘されており、女性の心理発達は段階的にすすむというよりはもっと混沌を含んだ別のモデルが必要なのではないかと思われる。

女性は自分の中に子宮という「小宇宙」を抱え込んだ「個の歴史を超越した、宇宙的なつながり」を生けると同時に「原初的なところのつながり」をも生きている存在である。対立するように見えるものを矛盾せずに同時に可能にするような多様な含みを持っているのである。母になっても娘性を捨てるわけではなく、かといってイニシエートされていないわけでもなく、同時的に、また終わりと始まりが円を描くようにつながりながら前に進んでいくようなイメージである。筆者はこのような女性の発達の特性を「円環的発達と複線の発達の二重構造化」と、なづけている。これはエリクソンの発達段階のような図式化が難しい。図3は筆者のものであるが、河合のいうように「はじめも終わりもなく、すべてが全体として輪の中に存在する」というイメージである。

CGユングは、「全ての母は自らのうちに娘を含んでおり、全ての娘は自らのうちに母を含んでいる(ユング-7)。すなわち、あらゆる女性は母にさかのぼり、娘に伝えられていく」と述べている。母娘関係に関してわれわれが困

難を感じるのは、この混沌を含んだ女性のライフサイクルゆえではないかと思われる。臨床家には、輪の中のダイナミズムを読む感性や直感が必要であろうし、輻輳的に捉える視点が求められると思われる。

図3 女性の心理発達



(2) 思春期と思秋期 —— アイデンティティの模索

(2)-1 思春期

人間にはふたつの存在様式がある。ひとつは自己中心的、自己愛的生き方であり、もうひとつは他者との関係性のなかでの生き方である。思春期の娘たちは、この選択の岐路に立たされる。自己中心的に挑戦と達成によるアイデンティティを追求する生き方と、愛の関係の形態である「受動性」をとりいれ、他者との関係性のなかで行き方を決めていく生き方のどちらを選択すべきなのかがいつも女性の内部で問われている。この時期多くの娘たちの関心は自分が誰に求められ、自分は誰を求めているのか、自分の魅力はなにかということに集中する。

肉体的な行動だけで、精神的受動性が伴わない場合、暴走が起る。自分の内的空間に男性を「うけいれる」受動性を喜びと感ずるところ

まで成熟していなければ、女性の愛は成就しない。女性らしさというものは、自分の魅力や体験によって内的空間が「こころから」歓迎するものを選ぶことができるようになったときに、うまれてくるものである（エリクソン-8）。ここに至るまでには、相当長い成熟のための時間がかかる。こうして異性との関係性にいきるといふ生き方を選択すると、自己アイデンティティの模索を一時中断すると考えられる。そして、思春期に中断した自己アイデンティティの模索は、思秋期に再開される。それが思秋期のアイデンティティの模索である。

(2)-2 思春期女子の現状

最近女子思春期の症状が変化してきているように感じられる。甘えと暴力化、身体言語ともいべきプリミティブな叫びと身体化。言語による論理的表現を嫌う傾向は、女性の論理的発達を求め、「自己性」の開発をよしとする、近年日本の社会的歴史的傾向に対する女性たちの反逆ではないかと思う。つまり、多様な女性の生き方が提示されている影として、子どもを産み育てるだけでは価値が低い、さりとて、有名大学進学やキャリア志向は自分の生きかたに合わないことに直感的に気付いた女性たちがいるのだ。大学進学やキャリア志向の女性の増加とそれを評価する社会的ムードの影響で、抑鬱を感情基調にした「空しさ」や「自分のなさ」といった症状の多発がおこっていることも見逃せない。

情的で私的な世界を、論理的に説明させることを彼女たちに強要しすぎではないだろうか。女性性、母性の世界は本来無意識的で、直感的に感覚的に通じる世界のはずであった。どこかおかしいと感じる思春期の少女たちは、相手のレベルに合わせるといよりも自分の言葉で語り、自分の感情を生のまま表現するようになったのである。それは叫ぶ、泣くという身体

化された「言語」である。また、欲しかった愛を得るのに、いい子であることを放棄し、攻撃的、暴力化した直裁的行動に出るほうが有効であると感じる少女もいるということであろう。

下坂幸三は、最近の思春期のクライアントの傾向として、治療者によく合わせる人が多いことを指摘している。「とても感じがいい、飲み込みも早いし、勘もいいし、治療者の言うことにあわせていくということです。過剰適応現象です。一般の人間関係にも現れていて、他人が自分をどう見ているか、どう評価してくれるか、他人が自分をアクセプトしてくれるか、そういうことを絶えず考えてそのことで頭がいっぱいという方。それと同時に、一方では他罰的です。もうひとつは、先行き不安です。これから自分はどうなっていくのだろう、一人前に世間へ出ていけるだろうか、という不安が強い(下坂幸三-9)」。牛島定信(1988)は、「こうした症例を治療していて感じるのは、その病態の変化の基盤に母子関係の質的変化がある。母子関係の変化をもたらしているのは家族構造の変化である。こうした家族行動の変化とともに、母親の子そだて機能が急速に弱体化している。核家族化が進行する中で、母親の子そだて機能が以前ほど支持されず祝福されなくなっている。その結果、健康でない限り、家庭外に自分の居場所を見つけて子どもを拒否するか、自らもつぶれて弱いものどうしの母子共生関係をつくるかのいずれかになってしまう。いずれにしても、思春期の精神発達は以前にもまして母子関係に依存するようになっていながら、一方では其の関係を支えるべき母親ないしは家族は弱体化しているという二重の意味での支持機能の減弱化傾向のあることはたしかである」と述べている(牛島定信-10)。

(2)-3 思春期と思秋期の類似性

母は娘に対して、自分の生きられなかった生

き方と自分の生き方の両方を二重拘束的に勧める傾向がある。キャリアウーマンとして生きられなかった母親は、キャリアへの憧れ、学歴、結婚の是非、配偶者の選択などを娘が幼い頃から呪文のようにくりかえし、刷り込んでいく。母の良い子がかんばってその実現に成功すると、意識的無意識的に母の嫉妬と羨望をうける。母は自分の夢を重ねて援助するが、支配もするのである。

どんな結婚をすれば幸せになるのか、誰が自分を実家の檻から救出してくれるのか、母の言うことに従っておれば安心なのか。母の愛が得られず守りを得られない娘たちは母性的依存関係を求めて異性に近づく。中年期の女性たちが自分の結婚生活をふりかえり、夫との関係に満足できない女性たちは家庭の外に居場所をさがす。中年女性たちはこれからの人生後半のアイデンティティ模索がはじまるのである。思春期が子どもから大人への移行期であり、思秋期が人生後半への移行期であるというように捉えると娘と母の類似性が指摘できる。

さらに、女性は青春期や結婚期、子どもが小さいときは、彼氏や夫、家庭や家族との関係性にいきるといふ課題を優先させることを選択し、「自己性」の模索を一時中断することになる。それが、中年期になって、かつて自分が「自己性」の模索を中断した年齢に娘が達したころ、再度この課題に直面させられることになる。思春期の「自己性」の模索が思秋期に再開されると考えられるのである。

(3) 思秋期と思冬期

「思冬期」は、筆者の造語である。人生70年時代は、「思秋期」で、自分自身の老年を受け入れたら、後は死の準備をすればよかった。女性の発達の節目は「思秋期」で一応の区切りがついた。しかし、80歳90歳まで生きる長寿時代に入り、娘、孫をもち、自分自身は姑であっ

て、しかも実母または姑がいるという状況は珍しくなくなった。実母は嫁よりも実の娘に介護してもらいたいと希望する。その準備として孫の面倒を見てきた事実を盾にされる。そのような担保をさしだされると、娘として従うのが親孝行であると世間も自分も納得させられる。子離れがすんでいよいよ自分探しの自由な人生を始めようとした矢先のことこの葛藤が生じてくる。親不孝な娘といわれるよりも現実を受け入れながら自分の居場所を見つけていく良い子でありたいと望む場合は、再々度の「母娘関係」が再開する。しかし、この葛藤はすさまじいエネルギーを持って、初老の娘を襲う。これが「思冬期」である。女性は、思春期、思秋期、思冬期と人生の三つの節目で、自己アイデンティティの課題に直面させられる。このことについては後に詳述する。

(4) 母娘関係の特質

(4)-1 母娘結合性と再結合性

CGユングは、「全ての母は自らのうちに娘を含んでおり、全ての娘は自らのうちに母を含んでいる。すなわち、あらゆる女性は母にさかのぼり、娘に伝えられていく」と述べている。河合によって「わが国の文化のパターンは心理的側面に注目すると、母息子結合のあり方を基礎として持っているが、母娘結合はもっと動物的自然な、古いものであり、この結合を破るにはギリシャ神話「ペルセポネー」のなかでのハーデースのような凄まじさが働く」と述べている。このストーリーを生きていると思われる事例が多い。とくに摂食障害をはじめとする思春期女子の事例、中年期の女性の事例は、母娘をセットにして関わる必要性を感じる。このような母娘のセット性が、女性の思春期、思秋期、思冬期を複雑にし、母子巻き込み型にするのである。

(4)-2 出産による母娘関係の再結合

結婚は、母との関係が切り離される通過儀礼である。家族制度の「嫁」の掟はなく、実家との距離はかなり自由である。同居でも別居でも心理的な通過儀礼になるかどうかは別のレベルである。嫁姑関係は「実の母娘のように」ほのぼのした、いい関係を理想として現実の関係を構築しようとする、逆にお互いに辛くて厳しいものとなる。実の母との間で体験しなかった母娘関係の二面性を体験するだろう。しかし、これもまた「苦しみを通して発達を遂げる」という宿命的イニシエーションである。結婚までの背景が違うものが同居するのであるから新しい関係を構築するエネルギーは相当なものである。そのエネルギーは、娘性を脱した新しい自分が生れ育つ新鮮さである。子どもがいない間は実家と切れ、姑との関係は遠くても、夫との絆があると信じられれば不安は感じない。しかし、出産子育てとなると誰を頼りにすればいいだろう。出産は女性にとって、とくに初産は、人生の大仕事である。出産が内的に意味するのは、娘時代の死であり、自分のからだの死を賭けた行為であり、個を超えた長い人類の歴史の中で繰り返されてきた生と死のドラマを体現化することである。

出産は、エリクソン(1973)によると「女性的な聖性の、すなわち生命と女性と自然と神との神秘的な連帯性の啓示である。こうした啓示は超自然的な種類のものである。そのゆえにこそ、それはシンボルにおいて表現され、また儀式のうちに現実化されるのだ。若い娘ないしイニシエートを終えた女性は、自分の最も深いところから湧き出してくるあの聖性を自覚する。そしてこの自覚は——たとえどれほど漠然としたものであっても——シンボリックな体験である。女性が自分自身の存在の精神的意義を発見するのは聖性を『了解すること』によってであり、それを『いきること』によってであ

る」、となる(15)。望まずして妊娠・出産するとイニシエートされにくく、産後鬱病や育児ノイローゼ、あるいはもっと深刻な心理的問題を発症することがある。だから出産は祝福され、悲しい涙ではなく、うれしい涙をながさねばならない。

だからこそ、誰かのこころの支えと現実的援助が必要である。子育て支援の現場での経験からは、すべてを「夫」に頼りたいという答えが実に多い。そういう関係を持っている女性もいるが、仕事を優先させざるを得ない大部分の男性たちは逃げ腰である。また、出産は女の秘儀的要素があるので、男性にすべてを頼むことがはばかれるところもある。やはり女性に頼りたいが、実家と切れ、姑との距離が遠い場合はそういう人が身近にみつからない。地域のなかでそのような援助をしようとしているのが「助産婦」である。現代的意味で、地域における母性機能を果たそうとしている。

出産後の子育ては一時的な出産とはちがって毎日繰り返される地味な日常である。実母や姑と切れ、地域でもつながりがないと「子育て」が孤独になり、追い詰められる。そこで出産もしくは子育てをきっかけに姑ではなく、実家の母との関係が再開するのである。子育て支援では、実家の母が相談に乗ってもらえないことを嘆き、恨む若い母たちが多い。依存できないことを寂しく思う彼女たちの娘的心情を無視できないのが現状である。

実母には、娘を支援するという大義名分とともに、孫との関係に生きがいを発見し、愚痴りあえる仲間ができ、かつ老後の介護を確約できるという喜びがあたえられ、娘には気安い子育ての協力者を得て省エネできる喜びと共働きが可能になり、お互いに都合が良い。

(4) - 3 介護による母娘関係の再々結合

核家族化し夫婦単位が中心になってきたとは

いっても、親が高齢化し介護を要するようになったら話は別である。家族の誰かが中心になって介護を受け持たねばならない。実の親の介護を断ることはとてもできない、子として罪深いことであるという社会通念があるからである。日本ではまだ、死に至るまで夫婦単位で暮らし、配偶者がなくなったらひとりで生きるというレベルの個人主義には至っていない。日本人には、別居は親の元気うちだけという覚悟の意識があり、民法に親の面倒を見る義務があると規定されているので、親が健康を失ったり、配偶者をなくしたら子どもに面倒をみってもらうのが常識である。「介護は家庭で」という国の方針も、老親は子どもがみるべきものという常識を後押ししている。核家族として持った親と区別した生活を営んできた人々が、突然介護を契機に同居するという、無謀とも思える現実を受け入れるのであるから、さまざまなことが予測される。母たちは実の娘に介護してもらいたいと依頼する。嫁とは心理的に遠いし、葛藤含みであるとしたら、気をつかわない関係にあると母の側は一方的に思い込んでいる。母親は孫の面倒を見、娘の共働きを支えてきたことをたてにとって中年ないしは初老の思秋期の「むすめ」と、高齢の思冬期の「はは」の関係が再再度復活するのである。このとき、もしそれまでに母娘双方に自立性が確立されており、ほどよい距離が取れるだけの人間的成熟が達成されていれば、ウィニコットの言うように「二人で居るから一人になれる」ようになり、発展的創造的な生き方を可能にする。人生の意味を考え、人生を達成させるという、エリクソンの最後の発達課題を成し遂げるひとつの選択になるだろう。母娘のどちらか或は両方の「自己性」が未成熟だともとの依存的関係に戻ってしまう。ただ、「自己性」の開発は、幼稚園のときから「みんな一緒」が強調され、老人期の人々にも「みんな一緒にすることがよいこと

だ」が、染み込んでいてなかなか難しいことも確かである。

共働きを続行したくても、子育てを終えていざこれから気軽な自分の時間を楽しもうと思っても、実母からの願いを断れない結合性がよみがえるのである。もし断った場合のしんどさ——心の中に住む自責の念と親不孝な娘という社会からの非難の目に耐えるだけのエネルギーがあるかどうか、またその意味があると言い切れない自分の弱さにうちかてるかどうか——を考えると現実を受け入れた方がいいのかもしれない、と思うのである。人生の意味を考え、人生を完成させるというエリクソンのいう最後の課題をこういうかたちで成し遂げるのもいいのかもしれないが。

人生80年という長寿時代が実現して4世代5世代が生きる現代の新しい課題として「老親の介護」が浮上してきた。はたらき盛りの50歳台、60歳台の女性が70歳80歳に老親の介護のために生活が急変せざるを得ない事情がでてきた。家族による介護は女性が自己犠牲的に生きることによって保たれるのである。

しかし、介護は身内でという閉鎖的意識の中で遂行される現状はもう限界なのではないかと思われる。夫婦で共働きや自分たちの生き方を変えずに介護が可能なシステムが求められているだろう。核家族化によって親族的・地域的人間関係のわずらわしさから解放されたが、こころの深いレベルでは旧態依然とした親兄弟が仲良く助け合うという家族幻想を断ち切れた訳ではないので、まだまだ難しい時代は続くと思われる。

【参考文献】

1. 横山博 (1995) 『神話の中の女たち』人文書院
2. 河合隼雄 (1982) 『昔話と日本人の心』岩波書店
3. 小此木啓吾 (1983) 『家庭のない家族の時代』ABC出版
4. ミチャーリヒ・A (1972) 『父親なき社会』(小見山実訳) 新泉社
5. 山中康裕、馬場謙一、福島章、小川捷之編 (1984) 『母親の深層』有斐閣
6. ドイツェ、H. (1964) 『若い女性の心理』(懸田克躬他訳) 日本教文社
7. ユング、C. G. (1982) 『元型論』紀伊國屋書店
8. エリクソン、E. H. (1973) 『アイデンティティ』(岩瀬庸理訳) 金沢文庫
9. 下坂幸三 (1992) 『青年期の心的障害者に対する親と治療者との共同治療』金剛出版
10. 牛島定信 (1988) 『思春期の対象関係論』金剛出版

